

『交通難民1』

登場人物

- 噺家 (= 落語家)
- 落語好きの青年
- 港公園のおじさん
- 港公園のおばさん
- バス会社のスタッフ

噺家 (上手から登場。高座のざぶとんを整え、正座する。)

「えー、本日はようこそのお運び、まことに御礼申し上げます。……と言ったって、はるばる来ているのはこちらのほうなんですけれども (笑) ……そりゃあねえ、今は、成田からここまで、ほんのひとっ飛びで来られる時代ですからね。まあ、手続きはめんどうではあるけれども、んー、それでもね、昔は関所なんてところで、お役人にわけのわからない取り調べを受けて、ずいぶんとしんどい思いをして、やっと、ただそこを歩いていいぞ、と、お許しを受けて、それだけです。あとはまた長い山中を歩かなくては、そしてそういうことを何度も繰り返さないでは、たどり着けるものじゃあなかった。今は関所すぎれば、ただ座席に座ってじっとしてるだけで、あとは乗り物が勝手に運んでくれるんですからね。機内メニュー眺めるか、ときどき唾飲み込んで耳の管スッキリさせることぐらいしか、やることないんですから、気楽なもんですよ。気楽は気楽だけどね、……やはり遠い。空を飛んで来ても遠いと感じるくらいです。それが、電車、機関車すらない時代のことを考えてごらんください、途方もない道のりでございませう。そこにたどり着けるかどうかすら確信できない。そんな感じだったのでしよう」

(そばにある湯呑を取って、一口すすする)

「……そういう、心といますか、感覚というのを表すのに、よく、「長崎から強飯が来る」なんてえことを、昔のひとは言ったそうですね。(声色を変えて)「……嘘だよ、おめえ、そんな素っ頓狂な話が本当だってんなら、長崎から強飯が来るってもんよ」なあってふうに使ったようで、えー、強飯といますのは、ご存じの方も多くいらっしゃると思いますが、蒸した米をカラカラに乾かしたようなやつです。今じゃ、給食終えたあとの小学生が服にくっつけたまま家に帰ってくる、アレです。昔の携帯食というやつでね、水にふやかして食べたりした

んでしょうが、ま、好んで食べるようなものじゃアございませんな。その、カラカラに乾いたご飯。ちょっとやそつとじゃ悪くならない、そんな食品が長崎から江戸へ運ばれる、ただそれだけのことが、昔の人にとっちゃ、信じがたいフィクションのような話の代名詞として語られていたわけです」

「……と言うと、じゃあ、昔は長旅なんか辛いだけだから、滅多に無いものだったのかと言うと、そうじゃない。むしろ昔は、人生ついでで生きてるような人間がた一くさんいましたから、そういう暇を持て余した連中が、遣いだの信心だのにかこつけて方々^{ほうぼう}巡ったりしていたわけです」

「旅と言いますと、昔から「三人旅の一人^{ひとりこじき}乞食」なんて言ったりします。それはどういことかってえと、三人で旅をしていて何かの話題で盛り上がる、そうするとたいがい一人の者がしだいしだいに会話から外されてしまって、あとの二人が口角泡を飛ばすのを見ながら、手持無沙汰になっちゃう、と、こういうわけすな。だから、旅は二人ですするに限る。(声色を変えて)「おおい、なにをやってんだよおい、そんなちんたらしてたら日暮れ^{ひぐ}っちゃうよ、しっかり歩けえ」「そんなこと言ったってよお、おめえ、こんなあたり一面のたんぼ^{たんぼ}だよ……」」

(暗転)

* * *

青年・おじさん・おばさん

(登場)

(並んで、ラジオ体操をはじめ)

おじさん「(体操を続けながら) ほら、からだ^{からだ}が固くなってるだろオ。あんな芝生の上で寝てるからさ、冷やしちまったんだ」

青年 「夏ですよ」

おじさん「夏だってさ、夜じゅう海風にあたってりゃ冷えるよ。自分じゃ気づかないからだの奥^{おく}がさ」

青年 (動かしていた手足をいっそう大きく振る)

おじさん「あんなところで寝れるなんて、若い証だよねえ」

青年 「宿を取るお金がなかったんです。あと、気力も。……もう、ぜんぶどうでもよくなっちゃって」

おじさん「失恋か」

青年 「違います。……もっと大事な用事があったんです。でも間に合わなかったんです」

おじさん「へえ、あんたどこの人だい、どっから来たんだい」

青年 「東京です」

おじさん「東京のどこ」

青年 「……川口」

おじさん「川口は埼玉県だろう。おじさんだってそれくらい知ってるよ」

青年 「(気まずそうに) ……埼玉はほとんど東京でしょ、ここの人達からしたら」

おばさん「あたしの姪も埼玉にいるけどねえ、いつも自分の住んでるところが池袋までどれくらい近いか、そればかり言ってくるの」

青年 「……」

おばさん「でも息子は東京って言わないのよ、神奈川なんだけどね。ほんとよお、埼玉は東京って言うのに、神奈川は言わないのねえ。おんもしろいねえ」

青年 「いいですよ、埼玉で。訂正します、埼玉から来ました」

おじさん「ああそう。はるばる埼玉からねえ、どんな用事があったんだい」

おばさん「彼女に会いに来たんでしょ、若いんだからねえ」

青年 「彼女なんていませんし、その、若いから、って言うの、やめてくださいよ。僕はここに落語を聞きにきたんです」

おじさん「落語お？」

おばさん「あらあんた落語なんて聞くの？ 最近の若い子は落語聞くの？」

青年 「だから……、若者とか年寄りとか、関係無いんです。僕は僕個人で、落語が好きなんです。……だいたい、落語は大衆芸能、ポップカルチャーですよ。対象年齢なんて、本来は無いんだ」

おじさん「よくわからんけど、落語なんてどこでやってたかねえ」

青年 「市民会館で。僕の好きな噺家さんの、独演会がありました」

おばさん「おもしろかった？」

(ラジオ体操が終わる)

青年 「……開演時間に間に合いませんでした。それどころか、終演時間もとっくに過ぎて

ました、僕が長崎に着いたのは」

おじさん「東京からなら飛行機でビューンって、来れただろうに」

青年 「埼玉です。オンシーズンですよ。この時期の航空券なんて手が届きません。落語のチケット買うだけで精いっぱいでした」

(ポケットから紙きれを取り出す)

「だから、これで電車を乗り継いで来ました。JR ならこれ一枚で、一日無制限に乗れるんです」

おじさん「電車って、あの、普通の電車かい。新幹線じゃなく？」

青年 「(うなずいて) 寝坊して始発に間に合わなくて、大垣で乗り換えに失敗して、姫路でおなかが痛くなって、尾道の船着き場で一泊しました。尾道ですよ、尾道。そんなところまで行ったら、長崎なんてもうすぐにでも着けるものだと思ってました。でも、ぜんぜん着かないんです」

おじさん「(あきれた様子で) あんたそりゃあ、尾道は本州だもの。ここは九州のいちばん西なんだよ」

青年 「わかってますよそんなの、理屈では。それでも、乗換案内を見たら頭がクラクラしたんです。白市、岩国、下関、小倉、鳥栖……、乗り換え駅がまだいくつもある。岩国から下関なんか、3時間も乗りっぱなしだ」

おばさん「あたしらはそんなに長いこと電車に乗らないから駅の順番もピンとこないけど、あらそう、そんなにかかるもんなのねえ」

青年 「下関で空腹に耐えられなくなって、いったん降りて近くのスーパーで買い食いをしました。次の電車まで、まさかあんなに待ち時間があるとは思わなかった。……田舎って怖いんです。それ以降の乗り換えもぜんぶ悪いふうにズレて行って、けっきょく長崎に着いたのは夜の9時。まあ、尾道から始発で順調に来て、7時半にはなっていたんで、どちらにしろ6時半の開演には間に合いませんでしたけど。(不貞腐れて) ……でも、まあ、こんなこと、おじさんたちに言ったってどうしようもないんですけど……」

(暗転、または退場)